

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
January 2022

No.38 【特集】
ケアと語り

ケアを特集したシリーズの最終号。「いること」をテーマにした鼎談に続く寄稿では東日本大震災に関わる助成プロジェクトを掘り下げます。鳴子からの「お茶っこ通信」も最終回！





Presented by Daisuke Miwa

池間島の珊瑚礁。この美しい海は琉球王府時代から続く海岸林の植樹によって守られてきた。自然も人の暮らしも傷つけない、やわらかなモノづくりの取り組みが、ここ池間島で始まっている。(本写真の池間島を活動拠点とする「ヤラブの木」の活動を特別寄稿としてトヨタ財団ウェブサイトに掲載中です)

CONTENTS

FIRST WORD ● 小平信因
新年のご挨拶 …… 2

特集：ケアと語り

助成対象者オンライン鼎談

● 横山泰三 × 古山裕基 × 東畑開人
自己と他者の関係性にケアの多様なあり方を見る …… 5

私たちの取り組み—助成対象者からの寄稿

国内助成プログラム東日本大震災対応「特定課題」● 金田諦應
「ケア」は「ケア」を意識した瞬間から「ケア」でなくなる …… 12

研究助成プログラム ● 牛島佳代

地域における分断・人間関係を修復する手がかりに …… 15

JOINT ホット・インタビュー ● 南信乃介 & 西山佳孝

エジプトに公民館をつくらう！ …… 18

活動地へおじゃまします！〈宮城県大崎市川渡小学校を訪ねて〉● 加賀 道
IoTで子どもたちに新しい世界を開く …… 21

イニシアティブ助成プログラム ● 雪松直子・鈴木綾
ふりかえり評価を考える …… 24

「私」のまなざし ● 荻野紗由理

宮崎とバングラデシュの架け橋となるために …… 26

お茶っこ通信 第十九回 ● 加賀 道

たくさん遊んだことが今の自分の原点 …… 28

トヨタ財団ジャーナル …… 29

● 国際助成プログラム連続オンラインセミナー「国際協働プロジェクトの倫理と論理を考える」のアーカイブ動画を公開 他



公益財団法人トヨタ財団会長
小平信因（こだいら・のぶより）

2022年の年頭のご挨拶を申し上げます。

2020年の年明け以降、世界はCOVID-19の数回にわたる感染の波に翻弄されてきました。遺伝子科学の進歩により、以前は考えられなかったような短い期間でワクチンが開発されて高い有効性が示され、また、治療薬を含む治療の進歩がみられるなど、感染の初期に比べれば対応するための手段が整いつつあります。一方で、新たな変異株の発生を始め未知のことも多く、今後についてはまだまだ不透明な要素が多いと言わざるを得ません。更に、将来を展望すると、COVID-19を克服しても、新たな感染症が発生するリスクが指摘されています。

COVID-19は、人々が長い間意識することのなかった、社会の営みや世界の経済活動がいかに脆い基盤の上に成り立っているかを改めて認識させると同時に、将来に向かつての新たな構想の確立とさまざまなシステムの改革や創設の必要性を突きつけることになりました。短期間で終息しない深刻な危機への備え、個人の自由と公共の福祉のバランスのあり方、グローバル化のあり方を始め多くの課題が提起されており、COVID-19が収束していない現在こそ、こうした課題を突き詰めて議論すべき適切な時期と考えます。

一方で、今後もよりよい生活を実現していくためには、COVID-19の収束をめざしつつも、立ち止まることなく、それと共生しながら経済社会活動の活性化を着実に進めていかなければなりません。劇的に進歩しつつあるAIやデータを含むデジタル技術の最大限の活用は、そのための極めて有効な手段となります。

COVID-19により、世界の人の移動は大幅に制限され、人の移動に関して「鎖国状態」に近い国も生じています。多様な人々の大規模な移動や深い交流が新たな創造を生み、人類の進歩と経済の発展に大きく貢献してきたことを考えると、一日も早く人の移動に関する制約が緩和され、自由な移動に向かっていくことが期待されます。その実現のため新たな仕組みの構築を始めとして、各国が知恵を出し合い協調して行動していくことが不可欠です。

トヨタ財団は、1974年の創立以来、国内、国際、研究の三つの助成プログラムに取り組むとともに、数年前から、今日の社会の基本に大きく関わる二つの特定課題——デジタル技術等の先端技術と人間社

会、外国人材と日本社会——を対象とする助成を行って参りました。そうした中で改めて振り返りますと、長年にわたる助成の成果がともすれば助成対象当事者を中心とする狭い範囲にとどまりがちであり、助成の成果を踏まえた社会に向けての経験と知見の共有のためのトヨタ財団としての努力は極めて不十分であったと言わざるを得ません。そうした反省の上に立ち、昨年からは、オンラインセミナー等を定期的開催するなど積極的な発信に取り組み始めております。今後はさらに、広範なネットワークを有し思いを共有する諸団体とのパートナーシップも視野に、経験・知見共有のハブとなるべくデジタル技術を活用しつつさまざまな試みに挑戦して行きたいと考えております。

2年後の2024年にトヨタ財団は設立50周年を迎えます。設立時の志を大切にしつつも、この50年の間に大きく変貌した日本、世界の真相をしっかりと踏まえ、将来を先取りした、インパクトのある、真に社会に貢献する助成、活動を行うべく不断の改善を行って参りますので、皆様の変わらぬご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。



助成対象者オンライン鼎談：ケアと『いること』

自己と他者の関係性に ケアの多様なあり方を見る

横山泰三 × 古山裕基 × 東畑開人

司会：利根英夫（トヨタ財団プログラムオフィサー）

特集は「ケア」に関する鼎談シリーズの最終回。3回目となる今回のテーマは「いること」。能動的な介入や積極的なサービス提供とは異なる視点から「ケア」を考えます。現場のエピソードを豊富に織り交ぜつつ、複数の哲学者の考え方も参照しながら他者や地域社会との関係と「ケア」を語る議論が展開。

横山 はじめまして、横山泰三と申します。私は広島大学総合科学部を卒業し、いったん民間企業に勤めました。その後、2年経って仲間たちとNPOを立ち上げました。不登校やひきこもりの人たちがそのまま自宅から、テレワークで社会参加する、という社会起業でした。今でこそコロナをきっかけに「テレワーク」という言葉は浸透しました。今日の鼎談もまさにこうしてオンラインで行っていますが、当時はまだその言葉自体あまり知られていませんでした。

ひきこもりの方々の自助グループを作り、自分たちの悩みについて対話を通じて心理的に安心感と仲間（ピア）の意識を持っていただきながら、企業と結びつけるという取り組みです。それからしばらく経ったのち、もともと個人的に関心をもっていた西田哲学の研究をしたいと思い、京都大学大学院総合生存学館という5年博士一貫課程に入学し、2018年に修了して研究者としてのキャリアがスタートしました。

その大学院時代に2016年度のトヨタ財団共同研究助成をいただきました。自助グループにおける対話の国際比較研究、というテーマです。西田幾多郎は「対話」という言葉こそ使いま

研究とフィールド



【特集】

ケアと語り



ケアに関する鼎談シリーズも第三回を迎えました。ひとまず最終回となります。

誰もが一度は耳にしたことがあるけれど、その意味は一言では言い表せないほど多義的で、さまざまな人によって、さまざまな場面で使われる「ケア」という言葉。

「ケア」について語るこのシリーズの目的と期待は、大きくふたつありました。ひとつは、研究や実践の場に身を置き、「ケア」に深く関わってきた方々との話を通じて、その視点や価値観がとても多様だという実態を提示していくこと。ふたつめは、鼎談の参加者だけでなく、その議論を読んだ読者の皆様に、それぞれが持つ「ケア」についての考えを、さらに広げ、深めていただくことです。

最も身近な存在に着目した第一回の「家族」。そこから一步外に踏み出すような、第二回の「場作り」。こうして段階的に俯瞰のレベルを上げてきましたが、今回はさらに抽象的な「いること」がテーマです。

今回も「する／される」という関係を越え、他者との関係性により強く焦点をあてました。

誰かが誰かに「する」ということ、専門家によって提供されるサービスではなく、普通の人々（つまり素人）によってケアが「ある」状態。具体的な行為としては、「話す」ことよりも、「聞く」ことをイメージしました。能動的な介入ではなく、もっと受動的な——あるいは「中動的な」-「ケア」とも表現できるかもしれません。

第一回では、「ケアに満ちた民主主義社会」という表現がありました。「自分だけ」という利己主義ではなく、「わたし」を通じて他者、地域コミュニティ、社会を捉え直すことに、ケアが豊かで暮らしやすい社会につながるヒントがあるのではないのでしょうか。





●横山泰三(よこやま・たいぞう)
ラオス国立大学 ラオス日本センター 客員講師 研究員。教員・研究職と並行して公益法人の理事として、青少年福祉の社会事業を日本、ラオス、バングラデシュで展開している。2016年度研究助成プログラム助成対象者。

せんでしたが、対話への示唆を提示していました。そこで私が実践していた自助グループの対話と、研究テーマが結びついていったのです。

私は現場(フィールド)が好きなので、現在はラオスのルアンパバーン県でフム族という少数民族の文化の研究をしています。「哲学×文化人類学」というカタチでやっていますが、さきほどの不登校の自助グループで行った実践を活かして参加型の教育活動と自分の研究を結び付けているところです。

今日はお二人とお話できるのをとても楽しみにしています。

古山 こんにちは、古山といいます。平日はラオスで働き、週末はタイにいる家族のところに帰るとい生活はずっと繰り返しでしたが、コロナの影響でラオスからタイに戻れなくなり、そのうちにラオスから日本に帰らなければならなくなって2020年4月に帰国し、その流れで仕事をやめて現在はフリーです。

トヨタ財団で助成をいただいたのは、「心豊

学び、それを専門として今もやっています。

もうひとつ、これは大学や大学院で学んだというより自分で始めたのですが、医療人類学を学びました。元々人類学者になりたかったんです。アフリカの村で魔術の研究とかをやっていたのですが、そう思っていたのは高校生の時だったので、病気とかありそうだし、トイレは汚なそうだし、クローラー効いてなさそうだし、アフリカに行くのはちょっとこわいかも……、と思っていたところに、倫理の授業でユングの話聞いて、人間の心の深いところに多文化性があるのだとすると、アフリカへ行かなくても日本でサイコセラピーを学べばいいのではないかと思ったのが臨床心理学を学んだきっかけでした。それでも人類学、特に医療人類学にずっと関心がありました。これは医療に関する人類学で、いろいろなところの治療文化の比較にずっと関心を持ってきました。

具体的なキャリアとしては、京都にいた頃はスクールカウンセラーや教育相談所、学校関係のところで働き、それから沖縄に行って精神科クリニックで4年ほど仕事をして、無職になりました。その頃ちょうどトヨタ財団の助成を受けたので、無職の時代にやることがあったことは僕の人生の最大のラッキーなのではないかと思っています。沖縄では密室で行うカウンセリングの治療と、精神科デイケアといってみなで同じところにいる治療の両方をやっていました。今は東京に帰ってきて大学で働きながら、開業臨床といって密室で行うタイプのカウンセリングルームを自

かな死を迎える看取りの場作りというタイトルで、西宮市と尼崎市とタイ国コンケン県ウボンラット郡の介護実践の学び合いを実施しました。

なぜこういうことをやりだしたかというと、僕はタイのコンケン大学というところで看護を学んだのですが、実習中にある方が亡くなられたときにちょうどトッケイというヤモリが鳴きました。その

鳴き声が聞こえてきたときに、亡くなった方の周りを囲んでいた家族と医療者たちが、この人は死んで生まれ変わってヤモリになったと言ったのでそれにすごく驚き、生まれ変わるといのがすごく印象に残っていました。

その後帰国して日本の介護施設で働いたのですが、そこでは亡くなっていく人の現状を見てきました。基本的にはみんなかなり苦しそうな顔をして亡くなっていくんですね。あるおじいさんに、どうせ死ぬのになんで生きるんだろうと言われたのですが、それに対してちゃんと答えられませんでした。タイで見えてきた看取りの人たちはわりと穏やかに亡くなっていて、それが僕にとっての死のイメージだったので、日本に帰ってきた途端に変わってしまったのがすごく驚きでした。

そのようにわりと第三者的に見ていたのですが、僕自身が母の介護と死を経験して、死ってなんなんだろうということはずごく考えるようになり、とても自分事になってきた感じなんです。ちなみに、なぜタイなのかというと、分けて開いてやっています。もう一度大学を辞めて、開業一本でしばらく仕事をしようかなということ、大学と臨床の間を行ったり来たりしながら生きている感じです。

助成金で研究活動をしていくなかで関心を持ったのは、経済的な問題です。資本主義的な競争社会や自己責任というような厳しい社会環境の中でサバイブするために、研究対象だった沖縄のシャーマンたちが、一見怪しく見えるものをブリコラージュして使っているということを感じたのが一番大きかったかなと思います。当時僕は無職でしたし、自分が自身が資本主義の中で非常に苦しい思いをしている、名譽が剥奪されていたり、自分が一体なんなんだろうかというのがよくわからない、本当の自分がわからないというのではない、社会的な自分がわからなくなりやすい。そういうことをたくさん学んだので、それを何冊かの本にも書きました。

たとえば3年ほど前に『居るのはつらいよ』という本を出し、これは沖縄時代の精神科デイケアでのいろいろな患者さんとのエピソードを小説風に書いています。皆さんがやっておられる大広間でのケアと密室でのカウンセリングを比較して、それをケアとセラピーという言葉で語ったのですが、医療経済の中で収益を上げる装置としての精神科デイケア、つまりケアというものの素晴らしさについてはたくさん語られるけれど、でもそれが最終的に国の税金の使い道の問題とかそういう経済的な観点から収奪されていくという、ケアが非常に経済的なものに従属している、そ

日本もタイも高齢社会で多死社会、そんな中でお互いに初めて同じ土俵でいろいろ話ができるのではないかと考えたからです。

「いること」、他者の役割とはなんなのかという意味の質問を事前にいただいていたのですが、僕が高齢者施設で働いていたときに、すぐに怒鳴ったりするすごく嫌なおじいさんがいて、皆に嫌われていて僕も大嫌いでした。あるとき、そのおじいさんを連れて散歩に行こうという話になったのですが、普段おじいさんは散歩を嫌がるんです。でもなぜか、そのときは行くと言ってくれたので一緒に散歩に行ったときに、わざわざこんなところに連れ出してきてくれて本当にありがとう、嬉しかったと言ってくれました。

この人がこんなことを言うのかと驚きましたが、そのときにそのおじいさんの見方が僕の中でちょっと変わったんですね。そのあとにはいつもどおりの嫌なおじいさんに戻ってしまったのですが、そういうすごくわかり合えない相手との間に起こったあのときの気持ちってなんなのかな、それは長くは続かなくて短い一瞬の出来事だったので、そういうのを積み上げていくことにケアの意味があるのかもしれない、他者の存在というのがあるのではないか、いることの意味があるのではないのかなと思っています。

東畑 僕は京都大学の教育学部で臨床心理学を学んでいました。今、お二人はみんな「大広間」でやる支援の話がされていました。僕が、僕は力動的心理療法といって、面接室のような密室で一対一でやるサイコセラピーを

いう問題点も書きました。

その他にもいろいろやっていますが、僕の中心的な部分は心理学的な治療文化です。いろいろなものと比較しながら心が成長するとか癒されるってなんだろうということを考えていますので、お二人がされているひきこもりのことや看取りについて、まさに比較治療文化論的な話ができるかなと思って楽しみにしております。

他者と「いること」

利根 今のお話の流れで、「いること」や他者の存在についてどのような意見をお持ちかということ、東畑さんから順にお話いただけますか。

東畑 『居るのはつらいよ』はまさにその問題を扱った本です。「いる」とはなにかみたいな切り口から入るのではなくて、これはアンチテーゼとして出ている問題だと思えます。「ずる」ということ、なにかを成し遂げる、なにかを手に入れる、そういうことで僕らの社会の価値がはかられていますよね。それは非常に資本主義的な考え方ですが、そういうときにただだいるだけというか、素人にもできる、実際素人こそがいいのですが、そのように脱価値化されていくからこそ逆にいることが非常に苦しいんだということを書きました。

なぜ今ケアの問題が大事なのかということ、ある種のオルタナティブとして語られる必要があるということだと思えます。みんなが体験しているけどその価値がわからなくて、自

分で自分のことを批判しているところに対して、いやそうじゃない、それに意味があるんだということ語るためにいるとかケアということがあるのかなと思っています。

横山 「いること」と最初に聞きしたとき、ものすごく難しいテーマだと思いました。最近福祉開発の分野で「居場所」という言葉が使われています。居場所といったときに、たとえばNPOが一生懸命、高齢者や不登校の子どもたちの居場所を作ったりします。「ここがあなたたちの居場所だよ」と支援者が用意するわけですが、用意したら誰も来なくなるというジレンマが現場では往々にして発生します。その様子を見ていて、日本語の「いる」という言葉は翻訳するところなるのかな、とふと考えました。

さきほどの例で言いますと、居場所がない方々が自然とそこにみずから行く場所が居場所になるのだと思います。たとえば私の学生時代にはゲームセンターがあり、そこが若者たちの自然なたまり場、居場所になっていたなと思います。気づいたら居場所になっていたのであって、誰かに作られたからといって、そこが居場所にはなかなかありません。「啐啄の機」という言葉がありますが、ケアしようとする人がどれだけ支援をしようとする居場所づくりをしても、ケアをされる人がみずから主体的に居場所を居場所としていかないとなかなか居場所というものを創造することはできない、ということだと思っています。

古山 たとえば自分と気の合う人や話の合う人というものはそんなに難しくないと思きたり、また自分自身の理解が深まることで他者の理解も深まったりします。そのようにお互いが鏡のような関係性にあることを西田は示唆しました。

西田はプラトンを引用しながら「思考」というのは実は自分で行われている会話ではないか、ということ述べています。自助グループの対話というと、異なる個人が会話するようなものを想像すると思うのですが、実はその場で行われているのは自分自身との対話であり、また対話を通じてともに思考するという関係性で対話がなされていく。このように、私の研究では自助グループの対話と思考というものを、西田哲学を手がかりに分析していったわけです。

私自身の場合はラオスに来て、少数民族の人たちのピー信仰にもとづく、マナイズムやシャーマニズムを研究しています。そこでは、「個人」ではなく、自然一種としての対話が進んでいるといえますか、「自然」が色々な判断に影響を及ぼしていて、その自然をある意味

うのですが、嫌なやつとか話が合わないやつというものは難しいなあと思います。そういうのを避けて通るというのは一つの手段でしょうが、避けられないケース、たとえば医療者が患者をえり好みできないというのが一つあると思います。

さきほど話したような嫌なやつだと思いついでいたはずのおじいさんでも、ほんの瞬間だけ気持ちを通じる、気持ちが変わるみたいなことがあって、僕にとってはそういうのを積み重ねていくことがケアのかな、いることなのかなと思いました。気持ちいいことばかり求めていたけれど必ずしもそうではないし、そういう人ではない方が多いなかで、いかにしてやっていくかということかな。他人とすることは基本的に面倒くさいです。でもやはり一緒にいざるを得ない部分もある。

東畑 いまのゲームセンターの話はおもしろいなと思いました。オフィシャルな場所というのはいづらくて、たとえば教室にはいづらいいけど部室でたむろしているみたいな、つまり教室のようなオフィシャルな場所では自立したモードで生きていかないとけない一方で、人間の中には依存的な部分というのがあるわけだ……。依存的な部分というのがどのようにお互いに発揮していくか、もたれ合っていくかというようなテーマがあるのです。

さきほどおっしゃったおじいさんが急にいことを言ったというのは、一瞬その依存的な部分が素直に出たのだと思います。普段はそれが攻撃的に表れていたのだと思うのですが、散歩といういつもとはちょっと違った場

で基準に人間の規範が形成されているように感じています。

東畑 古山さんにお聞きしてみたいのですが、ハイテガールのなものはなにかというと、個人なんですよ。死ということを考えて有限な個人という実存を自覚していくみたいな結構厳しいありようなわけですよ。古山さんが見ておられるのはタイという仏教の国で死とみんなが向き合っていくような現場ですよ。人間というのは有限性のあるたった一人の個人だみたいな、これはもう自立してやっていかねばならないという勢いのようなものがあるわけですが、死と対面したときの人間の姿勢みたいなのは東南アジアのなかでどうなのかなというのを教えてほしいです。

古山 「じじい」と言ったときに「自律」と「自立」の二種類ありますよね。僕は似た意味だと思っただけですが、タイの人はあまりそういうことを思ってもいないような気がします。むしろそんなのは無理だと思っただけで、それを体現していると思います。

日本人の高齢の方でいわゆるロングステイをされている方が僕の周りに何人かおられて、そのうちの一人でタイ人の奥様をもつ方が亡くなられたんですね。亡くなる前にいろいろな話をしていたのですが、奥さんがいるタイの村にいと「死なせてくれる」ということを言っただけですね。それまでは一人で死んでいくと思っただけで、人に死なせて

面で素直にそういうものが現れたときに彼が古山さんにちょっと依存した。そのことが古山さんを癒しているわけだ。古山さんも、少し気を許して依存したみたいなのが起きるといのは素晴らしい体験なわけじゃないですか。そういうことが可能になる場所は、ゲームセンターや部室のようないわゆるアンオフィシャルな場所なのかなと思います。僕はこれはすごく大事な話だと思っていて、政府が地域包括ケアシステムで、地域に居場所を作っていくことと予算を出したりしますが、その会計処理とかをやり始めてしまうと居場所というのは壊れていってしまうことがあるわけですよ。

自然と人との対話

東畑 ところで横山さんにお聞きします。西田哲学とケアっていいテーマだなと思っただけですが、自助グループと西田哲学のつながりについて教えていただけますか。

横山 西田幾多郎は「自覚」とか「意識」ということを中心に初期は論文を書いていました。ある時期から弟子からの批判を受けて、「他者」や「社会」ということをテーマに考えを深めていきました。たとえば私たちはこうして言葉を交わしてお互いのことを知ろうとしていますが、やはり他者の「心」は見えない。また同じ言葉でも、話し手自身の経験や記憶、またはそのときの感情などから想起する意味や内容は全然違ったりします。また、他者との出会いから自分自身のことの理解で

もらってということ聞いて、なるほどそれは僕にとってはすごく楽だなあと思ったりするようなことがあります。日本に帰ってきて介護施設で勤めていると、家族には迷惑をかけないとか、よくそういうことを聞きました。どちらがいいとか悪いとかではないのですが、どちらを選ぶかと聞かれたら僕はタイで死のうと思いました。

ケアすることと、されること

利根 セラピーも同じだと思いますが、自分で一念発起してケアを受けに行く、ケアがある場所に行くとする個人的なモチベーションについてはどうでしょうか。他人に言われて来ているのか、自分で来ているのか、どのような流れで来ているんでしょうか。

横山 いろいろなバリエーションがあります。最初はひきこもっている子の家に行き対一の信頼関係を築くことが多いです。その意味では、円というよりも密室なのかもしれません、やはり信頼関係が必要になってきます。そのときにインシヤル・コンフィッションと我々は呼んでいるのですが、まず声をかける話し手がなにかしんどい体験や弱音を話していくと、不思議と相手もちょっと心を開いて自分の弱っている部分を語り始めてくれるようなところがあり、まさしく鏡みたいな形で他人の話を聞いて自分を見るということがあります。自助グループの会話は、円を作ってもモノローグの連続です。モノローグとして自分の体験を話していきますが、他



●古山裕基(こやま・ひろき)

“逝き方から、生き方を創る東北タイの旅”を主宰。現在は、京都の里山で、狩猟、昆虫食、養蚕、竹伐採などをしながら家族が待つタイに戻る日を待つ。著書に「東南アジアにおけるケアの潜在能力」(京都大学学術出版会)第13章担当。2015年度国際助成プログラム助成対象者。



●東畑開人(とうはた・かいと)
精神科クリニックでの勤務を経て、現在、
十文字学園女子大学准教授。白金高輪力
ウンセリングルーム開業。博士(教育学)・
臨床心理士・公認心理師。主な著書に『心
はどこへ消えた?』(文藝春秋)、『居るの
はつらいよ: ケアとセラピーについての
覚書』(医学書院)、『野の医者 笑う一心
の治療とは何か?』(誠信書房)などがある。
2013年度 研究助成プログラム助成
対象者。

の方の発言について否定や批判はしたらだめ
ということ、そのまま聞き放し言いつ放
しみたいな感じになっています。しかし、モ
ノローグを重ねることで見えない各人の思考
や意識のなかではダイアローグ(対話)になっ
ているのです。

東畑 古山さんにお聞きします。タイでは日
常の中に僧侶が入ってくるという状態は珍し
くないことだそうですね。それは科学的世界
観ではない、もう一つ違った異相の世界観が
同時に進行しているということなんだと思っ
たのですが、そのあたりが看取りや死を考える
ということにどういった影響を与えているのか
ということをご教えていただきたいです。

古山 お坊さんが血圧を測る機械を持ち歩
いていて、それで高齢者の方々の血圧を測っ
てのちに病院の看護師さんに報告している
ことがあるのですが、あるとき、あるおば
あさんを測ると血圧計が動かないというこ
とがありました。それを見たお坊さんが「あ
なた死んでるわ」と言ったらみんなが大爆笑
したんです。

んですね。それは、「不自然」なんですよ。「自
分のお金で買ったから私のモノ」といった都
市の資本主義的な発想とは異なる「わかちあ
い」(共有)が山村にはあります。実は多くの
若者が都市での生活に憧れをもちながら、そ
こでの生活の「貧困」に気づいて最終的には
家族が住む田舎に帰るケースも多いのです。

また、別に私がラオスの山村で生活をして
みて気づいたのですが、たとえば西洋的な医
療は「悩み」や「苦しみ」をネガティブに捉え
て、その部分を全体(健康)から取り除こう
としていく方向に答えを見いだしがちです。
鬱になったら、それは病気だから病院にいっ
てクスリをもらおう、といった発想です。し
かし、こちらの農村で生活をしてみて思うこ
とは、答えや原因を何か一つ特定するかのよ
うな、0か1かのデジタルな考え方とは異
なって、答えを一つに出さないアナログの重
要性です。0と1の間に無限の多様性を見る
のです。村のコミュニティではどんな人とも
ずっと一緒にいざるをえないですし、病院も
無かったりするので悩みや苦しみとも共存し
ていかなければなりません。たとえばこの鼎
談はZoomを切ったら終わってしまいます
が、農村ではそういうわけにはいかず「ミ
ニティ全員で悩みと苦しみをわかちあい、乗
り越えていくしかない。そうすると、お互い
が多様性を認め合って「みまもり」、ケアし
あっているような関係性に自然となっていく
のであって、医療サービスみたいな形でケア
を受けに行くとか、入院してしまうのではな
くて、自然と目に見える範囲で人が一緒にい

そのお坊さんは日本
に来たときも100円
ショップに行きたいっ
て、ずっと言っていたりし
て、すごく俗っぽいん
で、すよね。お坊さんだから
そういうことが俗っぽい
ことになってしまふので
すが、ひとたび人は死ん
だらどうなるのかとかそ

ういう仏教の話になると目の色が変わるとい
うか、雰囲気が一変するんです。お坊さんだ
けではなくてタイの人全般にそういう部分が
あるような気がしていて、僕はそれを「お坊
さんモード」と名づけています。そういうふ
うに人が変わったようになるときがあるとい
うか、二面性、三面や四面性がある人もいる
と思いますが、個人的にはそのような感じの
人が日本人にはあまりいないような気がして
います。

東畑 いまの話でいいなと思うのは「笑い」
ですね。真面目に考えると複数の世界がある
ことってどうなんだみたいな話になってくる
のですが、笑いによってそこを円滑に行き来
している感じがします。これはもう、僕もタ
イとラオスに行くしかないのではと思います
(笑)。さきほどの血圧計の話もそうですが、
もっとリアルなその場に応じたブリコラー
ージュの実践がある気がして、いいなあとい
う感じがしました。ぜひタイとラオスに行っ
たときにお目にかかれたら幸いです。(東畑さ
んは予定の時間がきたためここで退室)

る、一緒にご飯を食べる、表情をみる、支え
合う、そういうすごく自然な感じが本来のケ
アなのかなとよく思うところです。

自分の幸せが他者のケアにつながる

利根 ケアは医療的かというとケアやトリ
ートメント、つまり治療することとは違う。治
すことはもちろんいいのですが、治らないも
のもあるなかで現状を維持する、その状態を
ケアしていく……。よくなったり悪くなっ
たりするけれど、どの状態のときもケアしてい
く、みたいにならずと続いているものという感
覚があります。逆にいうと、だからこそ本
当にいろいろな立場の方たちがいるいるな人
たちに対してケアという言葉を使ってくる
ので、「ケアってなんの話だろう?」みたいにな
ってくるといふこともあると思うのです
が、それだけ多様なんでしょうね。

人が生きる、もしくは亡くなったあとでもケ
アの気持ちを持つというか、そういう心の持
ち方みたいなところもあるのかもしれないな
と思っています。

横山 キュア(治療)とは違って、ケアの奥
には「関係性」というキーワードがあると思
います。

古山さんが特にタイで見えてこられてきた
「看取り」の現場ですが、子どもも含め世代を
超えてそこで死にゆく人を見ていると思いま
す。他者の死を見てるときに、実は周りの
人は自分の「死」を考えているのではないか
と思います。目の前の人は亡くなっていくけ

利根 東畑さん、ありがとうございました。
この後は古山さん横山さんのお二人でもう少
しだけお話しただければと思います。

古山 2021年の3月に妻のおばあちゃん
が病院で亡くなりました。妻は家で亡くなっ
た方がいいんじゃないのって言うような人
だったのですが、おばあちゃんるときは病院
の方がいいよって言うっていて、それがおもし
ろいなと思っただけです。その場その場で
考えが変わっていくのがすごく柔軟でおもし
ろいなって。だからさっきの笑いじゃないけ
ど、これなら苦しくないなと思いました。

変わっていくといえば、タイでは食事の時
にもち米が入った籠が回ってきます。横
山さんはご存じだと思えますし利根さんも視
察にいらした際に召し上がったと思います。
あのもち米の籠が回ってくるというのが同じ
釜の飯を食べるような感覚があって、ああい
うふうに共に食べるという場もコロナの影響
でちょっと変わってきたり減っていくと、も
ちろんそれだけではないんだけど、彼らのあ
り方みたいなものも変わっていくのかなとい
うふうに感じています。

横山 おもしろい体験ですが、私が以前、一
人でご飯を食べていたら「一人で食べるこ
とは礼儀に反する」としかられたことがありま
した。「なぜ?」と思ったのですが、少数民族
の方々と一緒に農業をやってみてわかりまし
た。たとえばクム族の焼畑農業は、全員で協
力しあって収穫まで数か月かけて協働しま
す。だからみんなで収穫したご飯を一人で食
べるって、ちょっとした泥棒みたいな感覚な

れど、自分が生きていること、死ぬことを逆
に考えさせられる機会になったりするとい
う関係性がその場合のケアにあるのかなと思
たんです。目の前にあって、しかも自分を
含めて誰にも訪れる「死」という、自然の大
きな客観性と普遍性の前に、「生きているこ
と」を顧みるのではないのでしょうか。

ラオスに限りませんが、ほとんどの途上国
では調理され加工されたお肉ではなく、生き
ている鳥や豚をその都度絞めて料理をしま
すので、「死」というものが日常で身近です。逆
に、日本で生活しているときは「死」がとて
も遠く、体験できなかったように思います。

古山 たぶん自分が幸せそうにやっているこ
とが自分にとっての一番のケアなのかなと思
いますし、周りの人にとってもそれがその人
にとつてのケアになるのかなと思います。

よく妻に、あなたはシリアスすぎると言わ
れます。仕事を辞めるときも、仕事を辞めた
いと言ったら辞めたいいとあっさり言われ
て、でも、やっぱりだめだ、どうしようと言っ
たら you're not a にならばと言われたんです。
なぜと聞いたら、あなたはものを書いてい
るとき喋っているときが一番楽しそうだと
言われたんです。それを聞いて、そうかも
しれないなと思いました。

利根 パートナーが楽しそうかどうか、その
人にとつて何が一番幸せか、ということを見
ていらっしやるのです。古山さんも気にか
けられている、つまりケアをされているとい
うことだと思えます。長い時間ありがとうございました。

※本オンライン鼎談は、誌面に載せきれなかった内容を含めた拡大版をウェブサイトに掲載する予定です。

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

今号では「ケア」をテーマに、国内助成プログラム東日本大震災対応「特定課題」から1件、研究助成プログラムから1件のご寄稿をいただきました。



2012年度国内助成プログラム東日本大震災対応「特定課題」活動助成
「助成題目」東日本大震災「心と命」のサポートプロジェクト

「ケア」は「ケア」を意識した瞬間から「ケア」でなくなる

●金田諦應（宗教法人通大寺）

2011年3月11日2時46分、大地の底からの微振動はやがて大きなうねりとなって約三分間、地球を揺らし続けた。その後の大津波は東日本の沿岸を襲い、多くの人と財産を奪う。その日の夜、とんでもない光景を見た。大地が鎮まり、津波が去った後、被災地を包み込んだ満天の星空。そしてその下にはおびただしい数の遺体と人々の叫びがあった。

人々は想定外のでき事の前に喜怒哀楽の感情が凍り付き、未来への物語を紡げなくなった。瓦礫の中にホツとする空間・安心して泣ける場所を作る。そこは破壊され、凍り付いた時間と空間を再び繋ぎ合わせ、共に未来への物語を紡ぐ場所。色とりどりの「スイーツ」と入れたてのコーヒーにスペシャルドリンク。美しい花飾りには花言葉を添えた。瓦礫

の中にお洒落なカフェ空間ができて上がる。傾聴移動喫茶カフェモンクの活動がスタートする。そして尺取り虫が泥の中を這いずり回るように活動を始めた。さりげなくカフェの片隅にメッセージボードを置いた（左囲み）。最初は誰も来なかった。しかし、そこに「居る」

「Cafe de Monk」はお坊さんが運営する喫茶店です。
MONKは英語でお坊さんのこと。
もとの平穏な日常に戻るには長い時間がかかると思います。
「文句」のひとつも言いながら、ちよつとひと息つきませんか？
お坊さんもあなたの「文句」を聴きながら、一緒に「悶苦」します。



再生した海(2012年3月。提供:NPO法人「東北ヘルプ」)

事に意味があるのだと自分たちに言い聞かせ、じつと待ち続ける。次第に人が集まり始め、カフェは悲しみの物語で満たされていった。

「どうして俺が生き残った！」「助ける事ができなかつた！」

た「誰が生と死を決めているんだ」私たち宗教者に向けられた答えのない問いは、あらゆる宗教言語を拒絶する凄みを感じた。その場に居続けられなくなり逃げ出してしまった自分。現場に引き寄せられたり、逃げ出したりを繰り返しながら活動が続いた。

ある日、僧侶・牧師の仲間と犠牲者追悼行脚を行う。海が近づくにつれ、風の中に微かに磯の香が漂ってきた。やがて海岸に着くと、沖では漁師が海藻を採っていた。

「再生している！海は再生している！」私たちは再生の風の中に神仏の姿を見た。一つ一つの小さな命を包み込む大きな命の存在を感じる。そして破壊された海が再び蘇る様に「人

は必ず立ち上がる事ができる」そう確信した。「生きていく事には必ず意味がある。共に未来への物語を紡いで行こう」
カフェモンクの活動に確固たる座標軸が生まれた。

それから10年。活動は瓦礫の中から避難所・仮設住宅集会所、そして復興住宅へと続いていった。

「場」を開く力

人は自らの苦悩を「物語る」事によって再び立ち上がる事ができる。「物語る」事は心の中に溜まった悲しみや苦悩を解放していくプロセスである。そのプロセスはしなやかに揺れ動きながら決して途切れることなく永遠に続いていく。私たちの役割は物語が立ち上がる「場」を作る事。安心して語り出す事ができる「場」は、切に他を想う心——慈悲・愛——によって開かれていく。



①傾聴移動喫茶「カフェモンク」(2011年5月)。②カフェにきたお客さんとの記念撮影。左が筆者(2011年6月)。③協働する宗教者たち(2012年11月)。

しかしその「場」は同時にどうにもならない現実が突きつけられる「悲しみの場」でもあるのだ。他を思えば思うほど、どうにもならない現実がそこにあった。やがて慈悲・愛は行き場を失い暴走する。そして私たちは「慈場」と「悲場」の間を彷徨い始める。その場に「居続ける」事、それは逃げ出したくなる自分との対話(戦い)であり、私たちにはそこに踏みとどまる「耐性」が求められたのだ。そこに「居る事・居続ける」には「慈場」と「悲場」そのすべてを引き受けなければならなかった。

震災の夜の無数の星々。冷たくもあり暖かくもあつた輝きの下で、人間の存在を超えた宇宙の哲理を感じる自己と、星空の下に浮かぶ無数の死体と人々の慟哭に引き寄せられる自分があった。震災の夜に見た満天の星空は一瞬、私たちにこの世の真理を垣間見せた。そして、あの時、自分の中には宇宙の冷徹な哲理と慈悲が同時に存在していたのだ。

「場」をほぐす力

遙か宇宙の彼方からの視線。超出した死生観によってコントロールされた慈悲がケアの「場」を開き続け、そしてそこに「居る」力を与え続ける。

行き場を失った慈悲と愛はやがて共感疲労を起していく。だから厳しい場所にこそ「場」をほぐす力が必要なのだ。カフェモンクには遊び心が散りばめられている。メッセージボードに散りばめられた「モンク」「文句」「悶苦」の掛詞。BGMはビーバップJAZZのセルニアス・モンク。モンクの音楽は神懸った不協和音とルーズなテンポで貫かれている。それは被災した人々の複雑な心と歩み方と絶妙にシンクロする。スタッフ同士はニックネームで呼び合う。「YFO・吉田」「シルビア・西島」。私はその風貌と眼鏡の形から「ガンジー・金田」。スピーカーは「BOSE(ボーズ)」。遊び心と真面目な軽ろみは「場」をほぐし、自分をほぐす。そしてほぐし、ほぐされた「場」から新しい物語は紡がれていく。

ユーモアは人間だけに与えられた、神的と言ってもいいほどの崇高な能力である(V・フランクル)。少し高い所から、全体を見る視点と感性。そこからそれぞれが置かれている状況を変えていく。人はその笑いの中から生きる力を得ることが出来る。共に悲しみと喜びの境界線ギリギリまで降り、そこから表現される神の言葉。仏の言葉。ユーモアは切に他を想う心、愛の心で貫かれなければならない。一瞬にして開かれる未来への物語。

ユーモアは愛の即興アート。互いに響き合う「色即是空 空即是色」の世界が立ち上がる。そしてその前では「ケアする者」「ケアされる者」の区別は意味を失う。

暇げに「居る」事

心に傷を抱えている人は「ケア」という下心に敏感になり、決して心を開かない。そこに居ることが特別ではなく、何か昔からずっとそこにいたような、まるで空気のような佇まい。人は暇げにそこに「居る」人に心を開いていく。思わず話してしまうような佇まい。自他の境界線が限りなく透明で、悲しみを引き寄せる力を持った人。人はそういう人に近づいていく。

「ケア」は「ケア」を意識した瞬間から「ケア」でなくなる。「ケア」は「ケア」された事も「ケア」した事も、「ケア」の内容も全て風の中に消えていく様な「ケア」。その人が去った後に漂う残り香の中にこそ「ケア」の本質があるのかも知れない。ケアとはその人らしい物語が立ち上がるのを支えること。ケアとは結果ではなくプロセスである事。ケアはあらゆる人・物が動的に関わり



震災から5年が経った2016年。

震災から5年が経った2016年。漂う残り香の中にこそ「ケア」の本質があるのかも知れない。ケアとはその人らしい物語が立ち上がるのを支えること。ケアとは結果ではなくプロセスである事。ケアはあらゆる人・物が動的に関わり

合う事によって放たれる一瞬の輝き、そして眩き。ケアは人と人、モノと人との織りなすケア・アート。そしてその全ては、時間・空間の固定化を排除する流動的な「場」と、あらゆる時間・空間を引き寄せる寛容な「場」で成立する。

ともに「居る」事

震災から5年が経過すると、傾聴移動喫茶「カフェデモンク」は仮設住宅の風景の一部になつていった。

被災された方々はそれぞれが複雑な状況を抱え始め、そう簡単に解決ができない。私たちには困った人々に分け与える財力も、医療的技術や福祉・法律の知識などもない。しかし、いつもあなたたちの事を気にかけているという姿勢を崩したくなかった。なぜなら、私たちは長い間、苦にもされず、あてもみされず、邪魔にもされず、その側に「居る」事を許されたのだ。そして被災された方々が、その苦しみや悲しみから立ち上がる時に眩かれる珠玉の言葉、私たちはそれを「聴く」ことを許されたのだ。何もできないけど、いつも共にいる。「not doing but interbeing」それが私たちの役目であり、被災された方たちに対する敬意なのである。

人の生きる場所

6年が経過した頃からある人は住宅を自立で再建し、ある人は復興住宅へと移り住んでいた。ほとんどの人はそこが終の棲家になる。ある日、誰も居なくなつた仮設住宅の前

地域における分断・人間関係を修復する手がかりに

●牛島佳代（愛知県立大学看護学部准教授）

2018年度研究助成プログラム
「助成題目」福島県の記憶を未来に——「親子をつなぐサポートブック」と当事者語り部活動——



私たちが福島に関わった理由

「福岡なんて遠いところからなぜ福島を調査するのか、興味本位でやらないでほしい」
2013年1月、「福島子ども健康プロジェクト」の調査事務局を置いていた当時の私の勤務先（福岡大学医学部公衆衛生学教室）には第1回のアンケート調査票が現地に届いてから、こうした苦情が相次いだ。2013年1月といえば、まだ原発事故から2年足らずで、食生活や子ども遊び場、住まいの除染など、放射能への対処をめぐる混乱や迷いが続いていた時期であった。加えて、国やマスメディアなどさまざまな機関による調査が行われていた時期でもあった。確かに、現地からすれば、遠く離れた九州から、前触れもなく送られてきた調査票は「迷惑」以外のなものでもないだろう。

では、私たちが福島に関わろうとした理由はどこにあるのか。次の二つである。一つ目は、「福島子ども健康プロジェクト」のメンバーの多くが水俣病を経験した不知火海沿岸

地域を研究してきた。そこから、公害環境問題は自然生態系への影響にとどまらず、人の心や人間関係に長期にわたる多大な負荷を与えること、そして、こうした心と関係の問題は一朝一夕では解決できないし、一度崩れてしまった人間関係は容易には修復できないことを身をもって体験してきた。

二つ目は、私事ではあるが、原発事故が起きた当時、双子を出産したばかりの母親であったことにある。初めての育児は、急な発熱や嘔吐、肌あれなど不安と緊張の連続であった。食べ物や環境などに細心の配慮を要し、常に自分の育児のあり方を問われているような気がした。ただでさえ、育児は不安や迷いの連続であるのに、放射能という目に見えないものに怯え、かつ情報が錯綜し何が正しいのかわからない中で、日々判断を迫られる福島の母親の心境はどれほどのものだろう。水俣に継続して関わってきた私たちだからこそ、そして幼い子どもを持つ母親だからこそ、同じ目線で福島に起こった現実を受け止め、母親の不安の軽減や亀裂の生じた人間



震災から10年目の2020年。傾聴移動喫茶「カフェデモンク」の活動は続いている。

で老人がため息交じりに呟く。「仮設住宅では薄い壁から聞こえてくる声に悩まされ、時には苦情を言い合ひ、時には助け合いながら必死に生きてきた。復興住宅では扉を閉めたらにも聞こえない、

そして、人の気配すら感じない。今思うと、人の住む場所って本当は仮設住宅のような場所なんだろうね」と。鉄の扉に閉ざされ、静寂な老いと病、そして孤独の影が漂う復興住宅では、仮設住宅での日々を懐かしみ、人間の生きる「本当の場所と繋がり」を問いはじめている。

東日本大震災から10年を経て、今世界は感染症との戦いが続いている。「場」を共有することの制限。共に「居る」ことへのためらい、そして恐怖。人類は生を共有し、そして死を共有する事によって文明を築き、文化を興して来た。私たちはあの未曾有の災害から共に生きる事の意味を突きつられた。今こそ、そこから得られた知見をもう一度振り返る必要があるのではないだろうか。それが逝ってしまった二人近い人々の死を共有し、私たちの未来への物語の中に織り込み続ける事になるのだと思う。

関係を修復させる道筋を共に考えていくことができるのではないか。

研究者と当事者との間の避けがたい溝

こうして、2013年1月より福島県中通り（福島市、郡山市を含む9市町村）の2008年度出生児（6191名）とその母親を対象に、年1回のアンケート調査を開始した（2021年1月には第9回調査を実施）。しかし、冒頭にも示した通り、このプロジェクトは、開始早々から壁に突き当たった。第1回調査票の最後の自由記述欄には、本調査に対する批判的な言葉が並んでいた。個人情報入手に関する疑問や調査の意義を問うもの、そして調査の依頼を受け取ったことによるネガティブな心情などである。その心情として特に多いのは、調査の依頼を受けたり回答したりすること自体がストレスや不愉快の原因となつたり、調査をきっかけに不安になるというものであった。



調査票が到着する数を記録したボード（第5回調査：2017年）

設立当初から福島の親子と研究者がお互いの知識と体験を持ち寄って、協働して問題解決の糸口を模索していくことを目指していた。その第一歩として

第1回調査票の最後のページで「今後、調査結果を生かして、小さなお子さんを持つお母様たちが、原発事故や子育てに関する不安を自由に語り合う場を作りたい」と自由記述を求めたが、この構想に対しても批判が寄せられた。

「この先も大丈夫と思っているママと、不安をかかえながらしようがなく住んでいるママと移住計画中のママが語り合うなんて戦争」語り合う場ができて結局、避難できるワケもなく、なんだか語り合えば合うほど、不安になるような気がします。不安を語り合えば、何か解決策が見つかるのでしょうか？この不安な気持ちがなくなるのでしょうか？近所の子どもを持つ母親の方と放射能の話をするといつも気持ちが重くなります」というコメントに見られるように、話し合いの場を作ったとしても争いや不安を増幅する結果にしなければならないし、実質的な「解決」にはつながらないというものであった。

研究者と当事者との関係性の構築

私たちは、第1回調査に対するリアクションから、原発事故の影響に関する実態調査に加えて、調査参加者との関係構築を最優先事項の一つとして位置付け、取り組んできた。調査票の自由記述欄に投げかけられた調査参加者の疑問や批判には、丁寧に手紙を書いて送る。また、毎年1月の調査実施の後、夏までには調査結果(速報値)を冊子にまとめて送付する。調査参加者の声(調査票の自由記述)をまとめた論文やプロジェクト事務局の活動

を掲載した「福島子ども健康プロジェクト便り」も送付した。さらに、調査参加者のお子さんには2013年12月からクリスマスカードを送付し、2014年4月からは誕生日カードを送った。こうやって、一足飛びで調査参加者同士の「語り合いの場」を設定するより、まずは研究者が調査参加者と向き合い、信頼関係を構築したうえで、その積み重ねから、調査参加者同士の横のつながりをつくるという、二段構えに転換したのである。

実態調査と関係構築の取り組みを続ける中で、調査参加者の心境の変化が、調査票の自由記述欄の声として表れ始めた。調査開始当初は批判的な声が多かったが、回を追うごとに、調査への理解、謝辞、今後に対する期待が増えてきた。もちろん、本調査・プロジェクトに批判的な立場の人は早い段階で、調査から脱落した可能性もある。だが、調査参加者との関係構築のための活動の積み重ねによって、調査活動に関する理解が深まった可能性がある。

二つのツール

私たちが、調査参加者への聞き取りを進めていく中で、なぜこのとき家族を置いて避難したのか、なぜ避難せずにとどまったのか、なぜ他の子どもよりも長く制限された生活を送らせたのか、それをいつか子どもに説明しなければならぬと考える母親が多いことに気づいた。そこで、原発事故という出来事とそれに続く困難な時期を母親がどのような思いで、そしてどのように乗り越えてきた

り手帳」の作成希望者は前者で96名、後者は186名と決して多いとはいえない。しかし、「親子をつなぐサポートブック」を受け取った参加者からは、「前回ご案内を頂いた時はまだ、自分が向き合えていなかったようで、思い出したくなかったのですが、本当にこれ良かったのか一度きちんと心の整理をしたほうがよかったです」と思っていました。「先日、GIFT BOOKが届きました。気難しくなってきた長男に、あの時のこと、想いを伝えるきっかけになり、あたたかな時間を持つことができました」そして「ふり返り手帳」参加者からは、「ようやくこの調査が自分のものとなったような気がします」との感想をいただいた。

ワークショップの目標

私たち「福島子ども健康プロジェクト」の目標は、福島原発事故によって失われた家族、地域における分断を修復する手がかりを見出すことにある。その一つの手段として「親子をつなぐサポートブック」と「ふり返り手帳」の活用を考えている。具体的には、原発事故後の困難な時期をどのように乗り越えてきたのかについて、「親子をつなぐサポートブック」と「ふり返り手帳」を地域内で少人数の親子が持ち寄って他の家族と語り合う。

「どんな哀しみも、それを物語にするか、それについての物語を語るならば、耐えられる」。これは、ハンナ・アーレントが『人間の条件』第五章のエピグラフに掲げた作家のアイザック・ディナーセンの言葉である。哀

しみや受け入れがたい困難な現実に向面した時、われわれはほとんど無意識のうちに自分の心の状況に合うようにその現実を変形させ、どうにかしてその現実を受け入れようとする。つまり、矛盾したように見える複雑で多面的な現実を自分の心に収めていくためには、一筋の、場合によっては複数の筋道(プロット)が必要である。そうした筋道の存在こそが物語の特徴である。

それぞれの「家族の物語」を語り合う時、たとえ放射能をめぐる相互の認識のずれや対処行動の違いがあつたとしても、「もし、私があるあなたの立場だったら、そう感じたかもしれない、そう行動したかもしれない」とそれぞれの認識と行動の「幅」を認め合うことができるのではないか。そのことで、家族と地域における分断の修復に向けた取り組みの第一歩となるのではないか。

時は折しも、新型コロナウイルスが世界を席卷した2020年。福島も例外ではなく、原発事故以来の見えないものに対する恐怖と日常生活の制限に地域住民が「あの当時」を思い返していた。「今なら原発事故の体験を語り合えるのではないか」「長期間、福島と関わり、調査参加者から少しは信頼を得られた今なら、呼びかけに応じてくれる母親もいるのではないか」。そうした思いから、「親子をつなぐサポートブック」と「ふり返り手帳」というツールを携えて、2020年11月に念願の第1回ワークショップ「語り合いの場ふくしま」を開催した。

現在までに「語り合いの場ふくしま」は計



未就学児の双子を連れて調査対象者に面会するため、郡山駅に降り立つ。

のかを子どもに語り聞かせるツールの作成を試みた。原発事故後の母親の不安や困ったこと、行動などを記録するとともに、「○○さん(お子さん)へのメッセージ」を添えた冊子、それが、2019年10月から案内を開始した「親子をつなぐサポートブック(GIFT BOOK)」である。

また、「親子をつなぐサポートブック」に続いて、調査参加者より、これまでの自分の調査票の回答や自由記載の内容の推移をまとめたものを作れないだろうかとの要望があり、これまでの個別の結果をまとめた「ふり返り手帳」を作成することとなった。この二つは、調査開始当初の福島母親には「語り合いの場」が必要といった研究者からの一方的な思い込みとは異なり、長期に渡って調査参加者と関わる中でニーズを見出し、共に意見や感想を出し合いながら形にしたものである。この二つのツールが、それぞれのこれまでの生活や心境の変化を客観的に見つめなおすきっかけとなり、そこから未来へと踏み出すための第一歩となればと思っている。

「親子をつなぐサポートブック」と「ふり返り手帳」の作成希望者は前者で96名、後者は186名と決して多いとはいえない。しかし、「親子をつなぐサポートブック」を受け取った参加者からは、「前回ご案内を頂いた時はまだ、自分が向き合えていなかったようで、思い出したくなかったのですが、本当にこれ良かったのか一度きちんと心の整理をしたほうがよかったです」と思っていました。「先日、GIFT BOOKが届きました。気難しくなってきた長男に、あの時のこと、想いを伝えるきっかけになり、あたたかな時間を持つことができました」そして「ふり返り手帳」参加者からは、「ようやくこの調査が自分のものとなったような気がします」との感想をいただいた。

私たちは「福島子ども健康プロジェクト」の目標は、福島原発事故によって失われた家族、地域における分断を修復する手がかりを見出すことにある。その一つの手段として「親子をつなぐサポートブック」と「ふり返り手帳」の活用を考えている。具体的には、原発事故後の困難な時期をどのように乗り越えてきたのかについて、「親子をつなぐサポートブック」と「ふり返り手帳」を地域内で少人数の親子が持ち寄って他の家族と語り合う。「どんな哀しみも、それを物語にするか、それについての物語を語るならば、耐えられる」。これは、ハンナ・アーレントが『人間の条件』第五章のエピグラフに掲げた作家のアイザック・ディナーセンの言葉である。哀

エジプトに公民館をつくろう！

エジプトの公民館づくりがもたらすリバーズ・イノベーション

Shinnosuke Minami

Yoshitaka Nishiyama

南信乃介 & 西山佳孝



トヨタ財団の国内助成プログラム助成金贈呈式でたまたま隣り合わせたことが、知り合ったきっかけという南信乃介さんと西山佳孝さん。お二人は意気投合した結果、エジプトでの公民館づくりをスタート(2019年度社会コミュニケーションプログラム「日本およびエジプトでの公民館づくりを通じた社会教育機関やその担い手へのリバーズ・イノベーション」)させました。国内助成プログラムのお二人がなぜエジプトなのか、なぜ公民館を作るのか。2021年11月初旬、Zoom越しにまだ夏の暑さの残る沖縄県からお話いただきました。

●聞き手：鷺澤なつみ(トヨタ財団プログラムオフィサー)

西山 南さんと出会ったのは2015年度の助成金贈呈式の会場で、たまたま隣に座って話したのがきっかけです。贈呈式のあとに離島つながりの助成対象者の人同士で飲みに行つて、そこで南さんのこれまでの活動などについてお話をお聞きしました。

私がやっている助成とは別のプロジェクトの活動地が、南さんが活動されている繁多川の近くの真地という場所だったので、その後、現地に行つた際に何度かお会いしました。そのときにそろそろエジプトで公民館を作りたいと思つているという話を聞いて、エジプトに公民館?と思つたのですが、でもそれをプロジェクト化したら面白いんじゃないかと思いました。

南 繁多川公民館で公民館の役割を学ぶため、エジプトからモハメッド・アブデルミギードさん(以下ミギードさん)がいらしていたのですが、西山さんと出会ったところがちょうどミギードさんがエジプトに帰つてそろそろ拠点を持ちながらやりたいと思つていた時期でした。それで西山さんとお話ししたときに国際交流基金の知的交流会議助成というのがあると教えていただきました。

西山 アメリカやヨーロッパの国がエジプトとつながるといふのはよくあるけれども、日本とエジプトのNPOがつながるといふのはあまりないと思つたので、以前から知っていた国際交流基金の事業を紹介しました。

南 エジプトでの視察には、幅広い視点で現地に適した状況を把握しつつ、日本の要素も取り入れられる知見をお持ちの西山さんにも

同行していただきました。

最初は3年前に1週間くらい行つたのですが、ミギードさんが視察や講演などをたくさん詰め込んでくれていたので、毎日どこかで何かしら発表していました。各地であたたかく迎え入れてくださつて、今の日本の地域をよりよくしていった公民館という拠点に対して関心を持つてくれたと思います。一方でそういう拠点が今エジプトにないのかというと、集まる場所はたくさんありました。コワーキングスペースみたいなところもありますし、モスクもありますし、映画館、舞台、カフェなどを併設している場所もありました。ただ、子どもから高齢者まで誰でもが行ける拠点というのがないと思つました。日本では運動公園や、大型遊具があつたりスポーツができる場所というのは、一部の特権階級の人たちが代々そのカードを引き継いでいて

その人たちしか入れないという感じでした。完全に分断されているようで、これは日本とはだいぶ違うなと思つました。そういつた点から、誰もが行けてそこで何かチャレンジしたり、あるいは若い時に思うように学ぶことができるような場所にニーズがあると思つました。

識字率が低いということもあつて、あとからでも勉強をして高収入につなげたりしたいという若者が多くいることもわかりました。日本の公民館をエジプトに持つていくことで、いろいろな人たちが力を合わせてさまざまなことにチャレンジしていきたいという期待を感じ、作る意義があるなと感じました。そんな様子を見て、次は実際に公民館を作るための作戦を考えようと思つながら帰国したのを覚えています。

——今回のプロジェクトは**実際エジプトに行つて状況を見て得たものをリバーズ・イノベーションするというのがテーマに掲げられていました。具体的にどのようなことをしていくのでしょうか。**

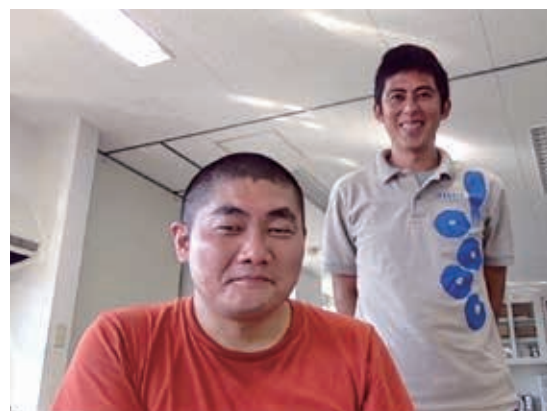
南 まず『公民館のしあさつて』という本をつくりました。これまでの取り組みをしっかりと検証しながら、日本の課題や実情も含め、エジプトから日本の公民館がどう見えるか、そういう入り口の目線を持つて公民館の未来を見ていくという取り組みです。そして、実



本プロジェクトで出版した書籍『公民館のしあさつて』

際に本を携えながら公民館、あるいは公民館的に人が集いながら地域をよくしていくという思いの人たちと一緒にこの本を読んで、自分たちの地域でもチャレンジしてみたいと手を挙げてくれるところに寄り添つていくようなことを考えています。

本の中に、ミギードさんが日本人がいきいきと自分の言葉でいろんな話や夢を語つているのは居酒屋が多かつたと言つていたという一節があるのですが、そういう話がないので公民館でできないかなあという投げかけもあつて、現在そういう拠点を持つていらっしゃる皆さんに、ひとつの事例としてしっかりと向き合つていただければと思つています。本の中では東京大学大学院教育学研究科の牧野篤先生や高崎経済大学地域政策学部の櫻井常矢先生をはじめ、社会教育に詳しい人たちの目線からも切り込んで解釈を付けたことで社会教育関係者にも伝わる言葉を入れることができたかなと思つていますし、社会教育関係者ではない人たちにもコメントを寄せていただいたので、全国の公民館、あるいは人が集う拠点というところで考える材料の両方を盛り込めたと思つています。



PROFILE

南信乃介(みなみ・しんのすけ)◎右

那覇市繁多川公民館館長。2015年度国内助成プログラム助成対象

西山佳孝(にしやま・よしたか)◎左

東シナ海の小さな島ブランド株式会社。2015年度国内助成プログラム助成対象(代表：山下賢太)

IoTで子どもたちに新しい世界を開く ——地域の課題解決と未来を探る相互体験

◎加賀 道 (トヨタ財団リサーチフェロー)



宮城県大崎市川渡小学校

【訪問地】
宮城県大崎市川渡小学校

【助成題目】
地域課題を題材とした高専
における実践型IoT教育カリ
キュラムの研究



今回、特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」の助成を受けている齋藤理さんのプロジェクトの一環として開催されたワークショップにおじゃましてきました。本プロジェクトの主役は高等専門学校(以下、高専)生です。高専の学生が教室を飛び出し地域課題を発見し、AIやIoT等で解決の手法を構築することが本プロジェクトの大きな目的です。また、自分たちの学んだ技術を小学生に教えることで、学習の定着を深めることも狙っています。

鳴子地域の抱える課題への取り組み

川渡小学校は、宮城県の北西部、鳴子温泉地域の入り口にある、山々に囲まれた自然豊かな学校です。鳴子地域は15年前に広域合併により鳴子町から大崎市になりました。旧鳴子町内には高校がもともとなく、高校に通うためには電車で近隣の市や町まで通学する必要がありました。私の場合は片道2時間半かけて高校に通っていました。そのような環境のため、子どもたちが高校生や大学生と触れ合う機会がほとんどありません。子どもたちにとって、自分の近い将来を想像することが難しく、どのような人生の選択肢があるのかについての情報源がとて限られています。特に、周辺の高校には、先端技術を専門的に学べる学校がないため、技術者になるという選択肢がほとんどないと

——西山さんの視点で、これまでこのプロジェクトに関わってこられた中で、この気づきや学びとなったようなところについてお聞かせください。

西山 最初に現地へ見に行つたとき、エジプトで本当に公民館の可能性があるのかとか、作つて大丈夫なのかというようなことや、視察の結果と今後の展開について、最終日の夜にホテルのロビーで南さんとミギードさん、そして奥さんの美幸さんと私の4人で話しました。そのときのミギードさんの問題意識というか一言がこのプロジェクトにつながってきます。「エジプトでの公民館作りをぜひやりましょう。ただ、日本とエジプトがミギードの関係にならないと継続はしないし、成功しない」と言つたんです。



エジプトでのイベントの様子

えればミギードさんの問題意識として、ODAやユニスコが世界各地でいろいろなことをやつてもうまくいかない、継続していかないことが多くある原因はそこにあると。その話を聞いたとき、日本から公民館をそのまま持つていってもまずだめだな、新しくエジプトでローカライズされた公民館の形をこれから構築していかないとけないと思いました。日本には現在14000館くらい公立公民館があつてほとんど減つてきているのですが、誤解を恐れずに言えばこの14000館の8割がたはうまく活用されていません。一方で、地方創生ということでも全国に交付金がばらまかれて拠点がたくさんできたけど、今となつては上手に活用されていない拠点や運営するノウハウがなかったりという問題もあります。箱があれば人が集まるわけではないですよ。エジプトでローカライズして日本とは違う形を模索していくときに、次の日本における社会教育とか公民館や地方創生の拠点とか、若い人たちが作りたいコワーキングスペースとかシェアードオフィスとか、そういうものにつなげてくれるような学びが得られるのではないかと。だから日本から持つていくことに意味があるのではないかと。ミギードさんがそこまで考えたかはわかりませんが、私はそのwin-winの関係というのを聞いて思つたんですね。帰国後は日本の中でもそういうことができるというのはどういう形なのかというのを考えるようになりました。

今後のプロジェクトの展開についてお聞

かせください。

西山 本ができる前からライティング読書会と称して読書会をさせていたところ、熊本県の教育委員会の人たちが興味を持つてくれました。教育委員会では年に一度エデュケーションウィークというキャンペーンをやっているのですが、この読書会が面白かつたということでそのキャンペーンの一環として小さな読書会のすすめみたいなコーナーを作つていただいたので、近々2人でオンライン配信の収録に行つてきます。まずは全国各地のつながりがある皆さんにお声掛けさせていただいて、12月から1月にかけて全国のいろんな場所で展開する準備をしています。

南 社会教育関係者を含めて、公民館つてこれまでもいろいろな面白い取り組みがあつたにしても、それが続かなかつたり大変なことがいろいろあつたんだろうなと思つていますが、そういう時に公民館をもっと活用してよりよい地域作りに活かしたいという人たちが力を合わせ続けることがすごく大事だと思つています。

情報だけではなく実際に人がつながつていくことがそれをすごく大きく動かすと思つているので、読書会というスタイルで私達の誰かも行きながら、企画したホストの皆さんもそのご近所の皆さんを巻き込みやすい形でできれば、人のつながりやその拠点がいきいきとそこ地域の人たちがやつてみたいあり方で進めていけるんじゃないかなと。古くて新しいというかそういう動かし方は、着実な一歩を生むかもしれないと期待しています。



小学校を訪問する前に高専の学生たちは実際に中山間地域に出向き、温泉旅館や農家で「困りごと」についてのヒアリング調査を実施。これまで身に付けてきた技術を使って解決策を考えました。

は、技術力を身に付けた高専の学生が実際に中山間地域に出向き、そこで暮らす方々の生の「困りごと」を聞き取り、その課題を解決するため、これまで学んできた先端技術を活用して解決策を考えます。このことにより、高専生は地域課題を知り、自分が学んでいる技術が社会に活かせることを実感できるというわけです。

母校でのワークショップの様子

私が訪ねたワークショップ会場の教室には、学生たちがまとめたポスターや実際に開発した機械が展示されていました。今回は、小学5年生とその保護者に対し、高専生がプログラミングについての体験ワークショップをおこなったり、地域課題解決のために開発した技術について実際に見てもらったりする授業の一コマでした。

代表者の齋藤さんは、実は今回の主役となる仙台商専の卒業生です。卒業後、自動車の制御部品を作る会社に就職し、その後、地域おこし協力隊として鳴子地域に移住されました。専門技術を持ちながら、地域の歴史やまちづくりなどへの関心も高い稀有な人材です。現在は、

次に、高専の学生たちが、鳴子周辺の旅館や農家さんから「困りごと」を聞き、それをもとに開発した機械の紹介をおこないました。教室の窓際に飾られた機械の周りに子どもたちが群がり、興味津々の様子です。

みんなの周りにも困ったことがあったら、もしかすると、今日勉強したような「〇」技術で解決できることがあるかもしれないよ、という話を聞き、子どもたちはプログラミングの体験をした直後ということもあり、夢がぐっと広がったような、そんな表情を見せていました。高専の学生たちも、自分が学んだ技術を活かし地域の困りごとを解決できることが嬉しかった、技術が社会とつながっていることを実感でき

き、社会貢献できたと感じた、ということを教えてくれました。この経験は学生にとっても大きな気づきの場となっているようです。

今後に向けて

実際に現場を拝見してみて、高専を舞台にプロジェクトを展開していることで、モデル化の実現可能性が高いということを感じました。というのも、仙台商専が、COMPASS(次世代技術教育のカリキュラム化)事業における「〇」分野の拠点校になっており、今回プロジェクトで構築している教育モデルが先行事例として取り上げられれば、全国に50校以上ある国立の高専に水平展開しやすい形になっているのです。

しかし、課題もあります。小



高専の学生たちが「困りごと」解決のために開発した機械に集まる子どもたち(右)。体験ワークショップ終了後は、高専の学生を子どもたちが質問攻めにしていました(左)。

「ITを軸としたモノ・コトづくり」をおこなっている仙台の企業で働いていますが、コロナ禍の影響で完全在宅勤務に切り替わったため、鳴子地域に暮らしながらリモートでお仕事をされています。自己紹介では、「僕は川渡小学校の近くに住んでいて、自宅ですーTのお仕事をしています」ということを子どもたちに伝えていました。聞いていた子どもたちやその保護者は、そんな暮らしがこの地でできるのか!というような驚きの声を上げていました。



部屋の明るさを計る機械を作る体験の様子。

部屋の明るさを計る機械を作る体験等をおこないました。タブレットの画面上にプログラムを設計し、それに応じて手元で用意されたブロック状の部品を基板に差し込んでいくと、部屋の明るさが数値として画面に表示される装置が完成します。子どもたちは、高専の学生に質問をしながら、次々と装置を完成させ、部屋のあちこちの明るさを計っていました。みんな、夢中で取り組んでいます。後方で見学していた先生が、「〇〇ちゃん、いつもはすぐに飽きておしゃべりしたりするけど、今日は全然していない!」と驚いたようにつぶやいているのが印象的でした。

として組み込んでもらうことが非常に難しいという点です。今回は学年ロビーの柱を活用して試験的に実施され、子どもたち、保護者、学校側から好評を得たとのことですが、すぐにカリキュラム化されるわけではなく、今後も、まずは総合学習の時間等を使い、同様の活動を実施することになりそうです。

また、一番強く感じたことは、高専の先生も小学校の先生も超多忙な毎日をご過ごされている中、先生方に負担をかけずによい授業を提案するためには、モデルを提示するだけでなく、実施に際し学校や地域をつなぐコーディネーターが不可欠だということです。今回は、代表者の齋藤さんがその役割を果たしていましたが、モデル化する際に、コーディネーターも組み込んだ形で展開できるかどうか成否を分けるのではないかと感じました。

川渡小学校での体験ワークショップ終了後、教室では高専生や齋藤さんは子どもたちに取り囲まれ、「どうすれば高専に行けますか」、

「高専に入学するためには今からどんな勉強をすればよいですか」等、質問攻めにあっていました。プロジェクトの目的の一つであった、地方の子どもたちの職業選択の幅を広げるきっかけになったのではないかと感じました。子どもたちが、新しい世界に出会ってとても嬉しそうなお顔をみたりして、私自身も嬉しくなるような一日でした。



最後にみんなで記念撮影をしました。

日

頃、NPOのコンサルティングをしていて私が感じるのは、団体は、自分たちが取り組んでいることについて、かなり謙遜されるということ。こちらが驚くような独自の工夫や職人技があっても、「そんな大したことやっていない」「できることをやっているだけ」と。私がふりかえり評価で実現したいのは、現場のNPOが、自分たちがやっていることを言語化し「これで良かったんだ」「ここが強みなんだ」と自分たちを信じられるための、自己評価の仕組みだと考えています。一方、評価という言葉に対しては、「数字で表現できなければいけない」「目に見える成果だけを採り上げる」という認識があるようにも感じています。

確かに、行政の委託事業などで、活動が自己満足になっていないか確認をしていくための評価は重要です。しかし、数字にしさえすればそれが正しく測れるのかといえば、そこにも疑問が湧いてきます。それは誰のための数字か、誰

が決めた数字なのか、と。一般的に、企業の仕事などでは開発された商品やサービス、それによる売り上げなどの「事実」が仕事の成果として捉えられることは多いですが、福祉領域やNPOなどでは、人の「感情」や関係性など、目に見えないものの変化が重要なはず。

数字の力は強いけど、数字が支配できるものは少ない。知り合いの理科の先生から、「自分は理数系専門であるからこそ、数字の限界を知っている、感情など数字では及ばない大事なものがあつたことを尊重している」と言われた時に、得意分野は違っても、想いは一緒なんだなと思つて、嬉しかったことを覚えています。

感

情の変化を言語化するのが、上手な人もいれば、すぐにはできない人もいます。団体の代表などがうまく言葉でまとめた時に、周囲の人はつい「あ、私も同じです」と言ってしまうがちですが、実は、その言語化に含まれていない、大事にされず、こぼれ落ちてしまつても

ふりかえり評価を考える

トヨタ財団ではNPOの基盤強化や市民参加など非営利セクターの発展に資するプロジェクト、他組織との共同助成、民間財団として支援の意義が大きいと考えるプロジェクトなど、能動的に取り組むべきと考えるプロジェクトに対してイニシアティブ助成という枠組みで支援を行っています。

今回は2019年度に引き続き2回目の助成を受けたふりかえり評価実行委員会の「ふりかえり評価」に関する取り組みについて途中経過をご報告いただきます。

● 報告団体概要

【プログラム名】2021年度イニシアティブ助成
【助成題目】ナラティブアプローチを活用した草の根NPO「ふりかえり評価」実践拡大
【代表者名】雪松直子（認定NPO法人アカツキ）



【写真上】Zoomにて行った会議の様子。右上は永田さん、右下は小池さん、左上は今回執筆された雪松さん、左下は同、鈴木さん。
【写真下】実際に行った「ふりかえり評価」での一コマ。

元

々自分は、教育現場や居場所系の市民活動に従事していました。そこで「評価」といえば振り返り（リフレクション）が基本でした。しかしその後、団体の拡大期を迎え、自団体のやりたいことにブレがないかを確認する意味で事業評価（エバリュエーション）を始めたり、行政の事業を受託するなかで評価を学ぶ必要を感じ独学で学びはじめました。今は他団体の評価の伴走もやらせてもらって

いるという経緯があります。

評価に関わる時の僕の問題意識は、「パターンリズム」にあります。当事者がそこに参加できなままに、事業者や支援者の思惑や価値基準でその事業の成果を測る指標が設定されてしまつのは、当てはめられる評価と聞いていいでしょう。特にここに資金提供者が介在し、「成果連動型の資金提供」となることは、本人が望まない支援を強化してしまう恐れがあります。

ふ

りかえり評価の開発チームで、これまでに取組んできたことは大きく2つ。1つは「評価を取り巻く情勢」についての議論です。今、市民社会やNPO界隈に何が起きているのか？たとえば市民活動になぜ評価の導入がされているのか？どんな影響があるのか？それらを議論しました。議論の中で印象に残っているのは、当事者不在の価値基準の設定は、意図しない搾取や暴力構造が生まれるという話です。就労支援において、就労者の人数を求めるがあまり、本人の希望やタイ

もある。だからこそ、NPOに関わるメンバーや当事者が向き合つて話をする時間を確保する必要があると考えています。

ある日の健康体操の活動をふりかえって、「あのおばあちゃん、1か月前より背中が上がってたよね」「確かに、背筋が伸びていた気がした」「前は真夏でも黒い服ばかり着ていたのに、そういえば最近明るい色のシャツを着てる」「ほんとだ、気持ち明るくなったのかな」「休まず来てくれるようになったね」などなど、定性的なものから見えることは大きいです。

自

分自身、言語化するのは得意ではない方ですが、ふりかえり評価を開発するプロセスの中で、「私の言うことを聞いてもらえるんだ」「感情を大事にしたいんだ」という感覚を持ちながら、事務局や委員のメンバーと話し合えたことが、自信につながっていたように思えます。最初から綺麗に磨かれた言葉は、心には残らない。「それってわかんない」「どういうことだ」「と」や「と」を何回も繰り返すことで、一緒に納得感をつくっていくことができました。

私は、ふりかえり評価の開発に携わるまで、評価は、誰か専門家から自分に対して「されるもの」であり、自分で評価「するもの」ではないと認識していました。そして、同じように感じている人は、少なくないように思います。おりこうさんになって自分の言葉を飲み込まないように、どうしたら多くの人が、自分の感情に手を伸ばしていけるようになるか、自分も苦手だからこそ、伝わる方法を考えていきたいと思っています。

●雪松直子 認定NPO法人アカツキ代表理事／職員

ミングが後回しにされてしまつ、被災地支援のためのイベントで、スポンサーが満足する絵を撮るために、子どもたちが集められてしまつなどがそれに当てはまります。

2つ目は、ふりかえり評価の「骨格」づくりです。「ナラティブアプローチ」「社会構成主義」など、既に世にある概念などを手本に議論を重ね、手法や記入シート、情報公開の方法などを定めていきました。評価の際に事象の一部を「切り取る」ことは避けられないため、そこに自覚的であるうと気をつけています。

ふりかえり評価の開発プロセスで影響を受けたのは、「組織内民主主義」と「価値の外部化」という言葉です。自分は、言葉を手に入れたと感じた時、物事の考え方に対して、それ以前よりも手触りが増すという感覚があります。

組

織内民主主義と評価は縁遠いように思ふ方もいらつしやると思いますが、前述したとおり評価の価値基準が一方的に押し付けられる場合に起こる問題を回避するためには、民主的な話し合いや関係性、それを基盤においた評価の在り方が重要だと考えられます。

また価値の外部化は、資金連動型のアウトカム評価が強まることで、本来、NPOが持っている価値観を否定してしまい与えられた価値観を重視する事態を言います。これを逆転させていかなければいけない。「自分たちが大切にしていることに懸命に取り組む」というのが、市民活動の重要な点であり、良さだと信じているからです。

●鈴木綾（おりやま子ども若者ネット代表）

■ 一般的な「評価」のイメージとふりかえり評価の比較

	一般的な「評価」のイメージ	ふりかえり評価
英語	Evaluation	Reflective Review
英語の意味	評価、価値	省察／再吟味
評価結果の数	団体全体で1つ	参加者の人数分
評価結果の内容	統合する	統合しない
可視化する対象	組織、ニーズ・セオリー、事業プロセス、事業の成果、費用対効果	評価のプロセス
評価軸を決める主体	あらかじめ決められた価値判断する人	個々の参加者
評価を実施する団体	第三者・評価者	個々の参加者
重視する内容	客観性	主観性
他団体との比較	成果の比較が可能	プロセスの比較が可能

宮崎とバングラデシュの架け橋となるために

文・写真◎ 荻野紗由理
株式会社 B&M

海 外に関わる仕事がしたい！と高校卒業後に地元宮崎を飛び出しましたが、東京ではそういった仕事に就けず、13年後に地元に戻りました。そのきっかけとなったのは、宮崎でバングラデシュのプロジェクトに参画する機会を得たからです。

現在、当社(株式会社B&M)では「宮崎―バングラデシュモデル」と呼ばれる、バングラデシュのITエンジニアの育成と就職支援をする産学官の事業に携わっています。その中で当社の業務はバングラデシュITエンジニアと宮崎企業のマッチングです。このバングラデシュでのIT人材育成は2017年から2020年まではJICAが主体となり実施され、2021年から宮崎大学を中心とする連携団体に引き継がれました。バングラデシュ現地でITエンジニア向けに宮崎大学の日本語講座が開講され、その受講生を雇った宮崎市の企業には宮崎市から助成金が入る仕組みになっています。産学官が連携した高度人材の雇用促進モデルとして全国から注目を集めています。

当 社では2017年からバングラデシュITエンジニアを受け入れる宮崎県内企業の面接や受入準備に立ち会ってきました。ほとんどの企業にとって、バングラデシュITエンジニアは初めての外国籍社員となります。そのチャレンジに踏み切った熱い思いを持つ経営者の方、面接をしながら彼らの熱意に涙する面接担当の方、里子を受け入れるように生活支援をしてくれる人事担当者

した。宮崎大学や受け入れ予定の企業の方々からも彼らと多くのコミュニケーションをとっていたが、彼らの気持ちが離れないように日本側の連携も密にしました。先行きの読めない不安、オンラインでしかコミュニケーションがとれないもどかしさを感じる日々でした。

さ て、本助成事業の方はというと、できることをやろう、と既に受け入れをしてきている企業や宮崎で働いているバングラデシュ籍のエンジニアにヒアリングを行いました。来日してから長くて3年、短くて半年程度のメンバー及びその受入企業に話を聞きました。当初こちらで想定していた生活の立ち上げ(住居探しや各種手続きなど)については想定していたほど課題がでませんでした。「手間はかかったけど、やり切れた」というコメントが多かった印象でした。他には、移動手段の確保や私生活の充実、お祈りの場所やハラル対応のお店がないといった声が聞かれました。

また、それよりも印象に残っているのは企業とエンジニア双方から聞かれた日本語スキルを含めたコミュニケーション面やキャリアについての不安感です。特に、企業側からはバングラデシュ籍エンジニアがキャリアをどう考えているのか、また会社としてサポートしているのか不安。バングラデシュ籍エンジニア側からは、企業が自分をどう評価しているかが分からないといった不安が聞かれました。当時、私はヒアリングをしながら企



バングラデシュでの採用面接



宮崎空港でお出迎え



宮崎市長を表敬訪問



日本語の授業の様子

の方、そして右も左も分からない外国で働き始め、周りの支援に丁寧に感謝を伝えるバングラデシュ籍のエンジニアたち。地方宮崎と新興国バングラデシュは「人が好き」という共通点があると感じます。ビジネス的な付き合い以上に、人と人として色々な熱量と愛情が混ざりあいながら受け入れが進んでいくのを見させていただいています。

そ んな日々を過ごしていた折、知り合いからトヨタ財団の特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」の公募について聞きました。それまで人材紹介会社として雇用の機会を作ってきましたが、かねてより「もつと何かできるはず」と感じていた「受け入れ」面について調査・実証ができるチャンスと捉え、応募させていただきました。

関係者で集まり、企画を練っていたのは2019年11月。まだ新型コロナウイルスという言葉を聞かない頃でした。今後入国してくるエンジニアたちの生活支援について、調査・整理し、新しい持続可能なサービスとしての構築を目指していこうとワクワクしながら作戦を練っていたのを覚えています。そして採択いただいたのは2020年4月頃。日本では7都道府県に緊急事態宣言が発令された時期です。さて、困りました。その頃、水際対策として海外からの入国規制が敷かれており、新しいバングラデシュ籍のエンジニアが入国できなくなっていたのです。まずは不安を抱えている彼らにオンラインで面談などを行い、不安を払拭することが必要で

業側やバングラデシュ籍エンジニアの不安感に深く共感できるもの、どうすればいいか仮説さえ立てられずにおり、ぐるぐる頭を悩ませていました。そこで、調査事業からは外れますが、私自身「国家資格キャリアコンサルタント」を取得するに至りました。そのノウハウを活かしてキャリアをどう考えるか、それをどう伝えていくかといったツールを本事業内で開発させていただきました。今後、検証・改善していき企業やエンジニアがキャリアに対する不安感を払拭するための一助になればと願っています。

本 事業の企画の中では他にも多文化共生イベントやシンポジウムの開催などを盛り込んでいます。申請当時と状況が一変した今、オンラインなどを用いて何をどうバージョンアップさせて実施するかが本事業での次の課題になっていると感じています。

また、2022年2月10日は日本バングラデシュ国交成立50周年となり、メモリアルなことをしたいと感じています。これまでチャレンジを続けてきた企業やバングラデシュ籍エンジニアに敬意を込めて、本事業を最大限に活かしながらこれからも奮闘していきたいです。

◎ 荻野紗由理(おぎの、さゆり)

2019年度特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」助成対象者。助成題目「高度外国人材受入れ支援に関する産学官金の地方モデルの研究・実証活動」

たくさん遊んだことが今の自分の原点

●加賀道(トヨタ財団リサーチフェロー)

2015年に宮城県鳴子温泉にUターンし、在宅勤務生活も丸6年となりました。あつという間の時間でしたが、当時と現在の長男の写真を並べると、月日が着実に流れていることがわかります(左写真)。

さて、JOINT20号から毎号書かせてもらった「お茶つこ通信」も最終回を迎えることとなりました。SNSで誰もが気軽に発信できる時代ですが、自分の考えを整理して発信し続けるという経験は大変貴重なものでした。最終回は、私が地元で活動している原動力について考えてみたいと思います。

私は、子ども時代、せいぜい半径300mの地域でたくさん遊び、楽しい経験を積み重ねました。特に印象に残っているのが「5時剣」です。夕方5時のサイレンが公民館から聞こえると、子どもたちが近所の魚屋の前に集まり、剣道の素振りをするのです。



3歳(左)で「移住」した長男も今は小4!

魚屋のおんちゃん(おじさん)が、「はい、



素振りをやっていた仲間とともに、月に一度の森遊びを開催している。右が私。

今日は300本!」などと包丁片手に店の奥から指導してくれまして。みんな掛けて声をかけて素振りをした後には、必ずおやつや、

時には焼きサンマなどをもらい、みんなでわいわい食べました(魚の肝の苦さと旨さもここで覚えました)。その後は、近くの空き地でおんちゃんがソフトボールのノック打ちをしてくれて、日が暮れるまで遊びました。時には、おんちゃんと近所の川を遡上しながら網で魚とりをしました。子どもにとっては大冒険です。もう30年も前のことですが、本当に楽しかったということを体が覚えていたのだと思います。

大人になると、成績や学歴で比較されがちな場面にもたびたび出くわしますが、私は、子どものころに楽しいことをたくさん経験したことが、学力でははかれない経験知として



現在のおんちゃん(私)と私。おんちゃんは相変わらず面倒見の良さを発揮している。

自分の芯となり、自信になっているように感じます。

このような経験ができるコミュニケーションや自然環境は、かけがえない宝です。私は、各地

に、魚屋のおんちゃんのような人や、楽しい場がたくさん存在していることが豊かなくらしを生み出す源なのだと思うようになりました。地域の素晴らしい環境を引き継ぎ、子どもたちが思いっきり遊ぶ機会を作りたい、という想いが今の私の原動力になっています。しかし、当たり前だと思っていた思いっきり遊ぶことのできる環境は、コロナだけでなくさまざまな社会的な制約により、相当な工夫をしなければ得られないものになっています。このように時代と共に社会は変化しますが、子どもの育ちに必要なのはそう簡単には変化しないのではないかと思います。今、素振りをしていた仲間たちと、コロナで停滞していたお囃子会の練習再開を検討しています。

これを読んでくださっている皆さんも、新しい生活様式の中で手探りで活動されていることと思いますが、いつの時代も、それぞれの宝の場が各地にあり続けるよう、お互いに楽しみながら進んでいきましょう!そして、またどこかでお会いしましょう!



VIDEO UPLOAD

国際助成プログラム連続オンラインセミナー「国際協働プロジェクトの倫理と論理を考える」のアーカイブ動画を公開しました

国際助成プログラムでは「アジアの共通課題と相互交流——学びあいから共感へ——」という趣旨のもと、セクターや国を超えた多様なバックグラウンドを持つ人々が、同じ課題に取り組む仲間として協働・共創し、社会変革につながるパートナーシップ関係を構築するプロジェクトに対して助成を行っています。

取り組むテーマや手法は多岐にわたりますが、国際協働プロジェクトを実施するにあたっては、どのようなプロジェクトにも求められる哲学や考え方、実施上重視すべきこと、よくある壁などが存在します。そこで2021年度はオンラインによるセミナーを

4回にわたって実施し、本プログラム助成対象者に外部有識者を交え、国際協働の根底にある倫理や論理について掘り下げて議論し、考える場をめざしました。アーカイブ動画を公開いたしましたので、ぜひご覧ください。

特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」連続オンラインセミナー「外国人材受け入れの最前線」子ども、雇用、健康の現場から」のアーカイブ動画を公開しました

特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」では、日本における外国人受け入れの総合的な仕組み構築への寄与が期待できる調査・研究・実践活動に対して助成を行っています。

さまざまなアプローチで課題に挑んでいる、2019年度・2020年度の助成対象プロジェクトの代表者を招いたオンラインでの活動報告会を開催し、アーカイブ動画を公開いたしましたので、ぜひご覧ください。

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」2018年度助成プロジェクト実施報告会のアーカイブ動画を公開しました

2018年度より開始した特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」では、その初年度の助成対象プロジェクトの実施報告会をオンラインにて開催し、アーカイブ動画を公開いたしました。

INFORMATION

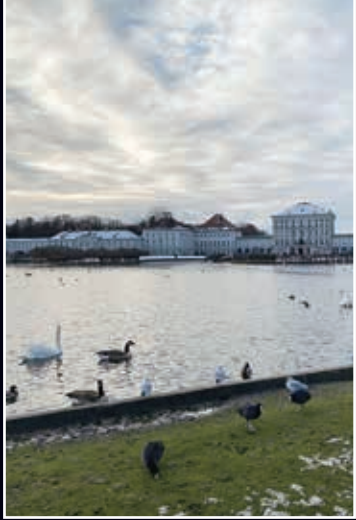
本プログラムへの応募を検討されている研究者や実践者の方はもちろん、多くの方々にご覧いただければと思います。前2本のアーカイブ動画も含め、トヨタ財団YouTubeチャンネルにてご覧ください。

本広報誌「JOINT」は、トヨタ財団の活動や考えを多くの方々にお伝えすることを目的に年3回発行しておりますが、この度、ウェブサイトのみに掲載する寄稿も展開することにいたしました。第一弾は2018年度国内助成プログラムより、助成題目「タマオイル・プロジェクト——島の自然と暮らしを繋ぎ直す好循環の創出」について三輪大介氏にご寄稿いただきました。

今号の表紙写真もご提供いただいております。ウェブサイトにはより多くの写真を掲載しております。本誌掲載記事の拡大版のみならず、ウェブサイトだけの特別寄稿もぜひ一読ください。

トヨタ財団ウェブサイト
toyotafound.or.jp





次号からの「通信」は、この写真の地からお届けします。[Y.T.]

【編集後記】
LAST WORD

● 1月ということでは子供のころの正月行事にちなんで少し。

私の地元でも、1月15日の小正月の日に、皆が氏神様(分社された小さな神社です)に正月の松飾や注連縄を持って行って、境内の真ん中で「どんど焼き」をしていました。「左義長」というのが正式なようですが、私の地元ではどうか、子供は「どんど焼き」と言っていました。「どんど焼き」の大きな火のまわりで餅を焼き、その灰まみれの焼き餅を食べると風邪を引かないなど言われていたものです。

50年以上も前のことで、家にはテレビぐらいしかなく、勿論テレビゲームなどはない時代ですから、学校から帰って天気が良い日は、その神社の境内に行けば誰かしら子どもたちがいて、大きな子から小さな子までが混じって一緒に陣取り合戦やかくれんぼなどをして遊んだものでした。ちゃんと大きな子が仕切って、小さな子にはハンデを与えてくれましたから、年齢差があっても問題なく一緒に遊べていました。いくら岐阜の片田舎のこととは言え、随分とのどかだったなと懐かしく思い出します。

先日、実家に顔を出したところ、兄が「もう神社をお守りしていくだけの人がいらないから、本社に神様をお返しすることになった」と言っていました。

た。言われてみて神社の氏子を数えてみたところ両手で軽く足りてしまい、しかも、高齢者ばかり。思い出の境内がなくなるのは残念ですが、仕方ありません。少子高齢化の流れをとて身近に感じました。[MO.]

● 第36号、第37号、そして今号と3回連続の特集として、ケアに関する鼎談を企画・実施しました。大きなテーマとして「ケア」を掲げ、そのなかで「家族」「場づくり」「いること」と切り口を分け、多種多様な視点をお届けすることを企画しました。

担当の助成プログラムでは、介護・看護に従事するケアワーカーの国際的な移動などについて考える機会が多かったのですが、「ケア」はそうした医療的な狭い意味にとどまらないのではないかと、思い始めました。身体的なお世話だけでなく、精神的なもの、間接的なもの、さらには意図の有無や若男女も問わず、人が(あるいは動物が)生まれてから(というより母体にいるときから)亡くなるまで——あるいは亡くなってからも精神的なつながりによって——「ケア」は常に存在して

いる、ということを感じたのです。

こう感じ始めたことには、やはり個人的な経験も大きく影響しているでしょう。自分が子どもを持ったこと、あるいは友人・知人の病の報せや訃報に触れることが増えてきたこと。不惑を迎え、俯瞰し、長い時間軸で人生と世の中を見られるようになってきた証左と捉えたいと思っています(歳を取ってきた、ということではなしに!)。ケアに関する鼎談シリーズは、財団ウェブサイトにも掲載されていますので、各回単体でも、すべて通しても、また順番も気にせずにお読みいただくことができます。忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。[Y.T.]

● 年未年始はいかがお過ごしでしたでしょうか。今年こそはコロナが収まり、去年より気兼ねなく旅行ができたり会食ができるようになったらいいなと思います。

毎号ご好評をいただいていたお茶っこ通信が最終回を迎えました。次号からはまた別の場所からの通信をお届けいたしますので、どうぞお楽しみに! 本年もよろしく願っています。[Y.T.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいは同封のハガキにてご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.38

発行日 2022年1月20日
発行人 山本晃宏
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

On The Journey
—旅の途上で—

東日本大震災から10年の節目を超え、あの瞬間からこれまでのさまざまな想いを未来へつなげていきたい。(本誌P.12参照)
● 写真提供: NPO法人東北ヘルプ(撮影日は2012年3月)





公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>

